

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12575

研究課題名（和文）伝統工芸を対象とした自然に基づく文化多様性と観光マネジメント

研究課題名（英文）Nature-based cultural diversity and tourism management for traditional crafts

研究代表者

丸谷 耕太（MARUYA, Kota）

金沢大学・融合科学系・准教授

研究者番号：50749356

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は自然と文化の連環と文化の伝達に着目し、生産者と観光者のつながりにより文化理解を共有する観光を追求し、適切な文化交流のためのマネジメント方策を提示する。結果として、自然と文化の連環を観光者に伝える具体的な方法として、工芸品や産地の特徴に応じて、まちあるきやツアーガイドの実施が有効な産地、トークイベント、展示や映像作品が有効な産地の2つが存在することがわかった。このような取り組みは近年実施されている産地全体のイベントである工芸祭産のように、地内で連携した仕組みづくりを行い、個々の負担を軽減することで可能となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、工芸における自然と環境の連環について理解を得るための観光サービスは工芸品や産地の構造によって形態は変わるものの、今日的な課題として取り組まれていることがわかった。一方で、個々の施設において、伝統工芸の観光は従事者にとって人手や時間が十分でなく、観光に関する専門的な教育も十分でないことがわかった。ワークショップの開催目的として、「伝統工芸への理解醸成」と「地域貢献」が多かったが、伝統工芸を理解するのに必要だと思われる要素についての説明や配布資料の使用が少ない。特に、自然環境や産業の現状に関する説明の重要性を示した。そのための人材育成が今後重要となることを提言した。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the link between nature and culture and the transmission of culture, pursues tourism that shares cultural understanding through connections between producers and tourists, and presents management measures for appropriate cultural exchange. As a result, it was found that there are two specific methods for conveying the link between nature and culture to tourists, depending on the characteristics of the craft and production area: town walks and tour guides are effective in some production areas, and talk events, exhibitions, and video works are effective in other production areas. Such efforts can be made possible by creating a system of cooperation within the area and reducing the burden on individuals, such as the Craft Festival, an event held by the entire production area in recent years.

研究分野：コミュニティ・デザイン

キーワード：伝統工芸 文化多様性 自然環境 観光マネジメント

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 自然に基づく文化多様性の保全に資する観光の理論化

生物多様性と伝統文化の関係を統合する議論では、国際的には言語や民族の多様性が中心となっているが、国内では文化の内容や自然と文化の関係性に着目した研究が進められている。木俣ら(2010)は里山における在来品種の保全と伝統的知識の関係を明らかにした。しかし、敷田(2016)は地域資源の背景にある自然と文化の理解について、都市部において自然の概念を用いた文化多様性が今後の観光研究に必要とされること、また生産者と消費者の文化の共有が重要であり、暗黙知となっている知識の伝達が課題とされている。

#### (2) 自然に基づく文化多様性の保全を可能にする観光マネジメント

申請者は伝統工芸を対象に原材料や技法の維持/変容に着目し、地域資源利用が工芸品自体や産業形態の固有性に寄与すること、体験等の工芸を活用した観光は文化だけでなく地域の自然や歴史への理解につながる可能性を示した。本研究は情報の伝達と観光マネジメントの観点から、文化多様性を享受し地域の多様性保全につながる持続的な観光の理論構築を目指す。

### 2. 研究の目的

#### (1) 文化多様性を決定する自然と文化の連環と文化の伝達としての観光サービスの把握

北陸における伝統工芸を対象とし、地域の資源について文化多様性をもつポテンシャルとして自然と文化の連環から文化多様性を決定する各工芸品の産地の特徴およびそれを生かした観光の取り組みについて把握する。

#### (2) 文化の発信者の認識と伝達内容の把握

調査対象地における観光者を対象としてアンケート調査を行い、実際の体験により観光者が受容する文化の内容を把握する。把握された自然と文化の連環がどのような体験により観光者に伝わるかを明らかにする。得られた結果と観光従事者の認識、実際の伝達内容との3つを比較し、現在の観光における文化の情報伝達のメカニズムや課題を明らかにする。

#### (3) 文化多様性と持続的な観光の評価と観光マネジメント方策の提案

研究成果をまとめ、伝統工芸の文化多様性を生産者と観光者のつながりにより文化理解を共有する観光を追求する。伝統工芸の特性や観光に携わる関係者の志向に合わせた、適切な文化交流のためのマネジメント方策を提示する。

### 3. 研究の方法

(1) まず、伝統工芸の自然と文化の連環について観光の場面でどのように伝達されているかを把握するため、北陸で実施されている工芸祭：千年未来工芸祭・RENEW・KUTANism・金沢21世紀工芸祭・高岡クラフト市場街・富山ガラスフェスタの歴代のプログラムのデータベースを作成する。また、それぞれのプロデューサーにインタビュー調査を実施し、各プログラムの詳細について把握し、プログラムの分類と傾向について分析する。

(2) 次に、石川県における工芸のワークショップを実施している施設81件を対象にアンケート調査を実施し、工芸における観光サービスの実施内容およびワークショップの内容や意識について把握する。さらに、ウェブアンケート(対象：全国の15歳~99歳の男女1002人)を実施し、工芸における体験の有無、および体験内容と意識を把握した。以上から、観光の実施者と観光者の意識の差を明らかにし、自然環境と文化についての情報伝達の実態を分析する。

(3) 以上から、伝統工芸における文化理解について、伝統工芸の特性や観光に携わる関係者の志向に合わせた文化交流のためのマネジメント方策を提示する。

### 4. 研究成果

#### (1) 北陸における伝統工芸の観光イベント「工芸祭」

伝統工芸における観光の取り組みとして、各工房でのワークショップは数多く実施されているが、近年は地域の資源を産地全体で活用する「工芸祭」と呼ばれるイベントが実施されている。工芸産地の工房や飲食店、行政などが連携し、工芸を中心とした地域文化の発信や経済の活性化を目的とし、地域ぐるみで展開される体験型イベントであり、主催者にとっては工芸の文化継承や出店者の利益・成長・ネットワークの形成、若者の活躍を通して地域活性化が期待でき、観光者にとっては工芸や地域に触れ親しみをもち、文化継承や地域活性化に向けた行動や意識の向上につながるきっかけとなるものである。

北陸で実施されている6つの工芸祭(図1)プログラムを分類した結果、見る/買う/食べる/体験する/知るの5つに分類された。「見る」プログラムでは、工芸品の展示や工房だけでなく、地域の文化や自然など地域資源を対象としていることがわかった。また、「知る」プログラムでは、工芸と地域の関係について学ぶことが主体となっていることがわかった(表1)。

表1：工芸祭におけるプログラムの分類

目的	見る	買う	食べる	体験する	知る
地域文化や地域活動の展示・体験会	地域の振興の店舗による工芸品の展示販売	地域の食材や産土料理のマルシェ・レストラン	工芸作家へのセミナー・講座	工芸について学ぶトークライブ	
音楽やアートのライブパフォーマンス	地域の異なる店舗が集まった工芸品の展示販売	地域の工芸品を用いた空間でランチ・ディナー	地域の振興の店舗に行ってもものづくり体験	地域性、まちづくりのデザインについて学ぶトークライブ	
工芸でものづくりの現場を見学	全国の工芸品が集まった展示販売	地域の工芸作家と交流できるカフェ・バー	地域の様々なものづくり体験ができるマーケットや作家体験		
工芸のまちあるきガイドツアー	工芸品のアウトレットやブザーマーケット	食べ物の展示、キッチンカー	ネットと観望鏡を通して撮影を行うものづくり体験	工芸について学ぶトークライブの撮影	
ホームページやSNSでの工芸品の販売	地域の異なる店舗が集まったオンラインストア	作り手と交流できるオンライン委員会		地域性、まちづくりのデザインについて学ぶトークライブの撮影	
音楽のライブ配信	全国の工芸品が集まったオンラインストア			地域や工芸を紹介する体験作品	
360° VRやARを用いたオンライン工場見学					作り手のインタビュー記事
工芸品を実際に見ているところを見る					
オンラインの会場との中継					
オンラインのまちあるきガイドツアー					
				オンサイト	オンライン



図1：北陸における工芸祭と開催地

北陸で実施されている6つの工芸祭におけるプログラムの変遷を調査した結果、コロナ禍の2020年および2021年は工芸品を「見る」、「知る」というプログラムが増加しているものの、「買う」以外に「体験する」ことが重視されていることが分かる。特に、「体験する」はコロナ禍にあっても必要とされ、工夫をこらして実施されている。また、工芸品を使用して「食べる」プログラムも取り組まれている(図2)。

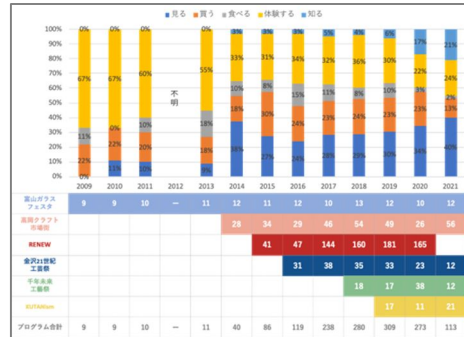


図2：工芸祭全体のアクティビティごとの割合の経年変化

富山ガラスフェスタでは、富山市の工芸品であるガラスが主体となるが、産地は原材料を算出する場ではないため、自然環境との関係が希薄となる。また、作家が工房で作業を完結するために産地としての面的なつながりも弱い。そこで、歴史が重要となるが、ガラスを作る・使うということが観光の対象と合わせて地域文化の展示を行っている。

高岡クラフト市場街は高岡市における銅器や漆器の産地であるが、分業化されているため、工場が地域に点在している。そこで、それぞれの拠点を巡るガイドツアーが実施され、産地の歴史や自然とのつながりを知る機会を創出している。

RENEWは鯖江市、越前市、越前町で和紙・漆器・打刃物・筆筒・陶磁器やメガネの産地の工芸祭である。水資源や山林が工芸品に欠かせない自然環境となるが、それぞれの活用について各工芸品の工房をめぐり工法を知ることによって産地の環境を理解することができる。工芸と民謡の掛け合わせをして地域文化を知るパフォーマンスもされている。また、千年未来工芸祭も同じ地区で実施される工芸祭だが、1箇所のアリーナを会場にしている点が特徴である。面的なイベントではなく、1箇所に集約するため、まちあるきではなく、トークイベントや映像作品の制作を行い、地域を紹介するプログラムを行っている。

金沢21世紀工芸祭では、金沢市に集積する多様な伝統工芸を扱うが、まちあるきのイベントやオープンスペースでの茶会、地域内のギャラリーを紹介するイベントを実施することで、地域環境を知る機会を創出している。また、数少ない地域の原材料として陶磁器の土が金沢にある。これを活用して、土採集から焼成までを長期間で体験するワークショップを実施していることも特徴的である。

KUTANismは小松市と能美市における陶磁器の産地の工芸祭である。展示会がメインとなっているが、トークイベントや映像作品において、陶石の採掘や陶土工場など原材料と自然の関係、産地の歴史についての情報発信を行っている。

以上のように、産地の自然環境と工芸のつながりは多様であり、それらを知るための情報発信の手段は異なる。それぞれの特徴に応じて、まちあるきやツアーガイドの実施が有効な産地、トークイベント、展示や映像作品が有効な産地の2つが存在することがわかった。また、工芸祭は個々の工場や施設が実施するよりも大規模な活動が可能となっていることも重要な点である。

(2) 伝統工芸における工芸ワークショップ

石川県には36種類の伝統工芸品が存在する。どの伝統工芸品においてもワークショップとして体験型観光の取り組みを実施している。その取り組み内容の実態をアンケート調査によって

把握した。観光のターゲットについては、若年層の個人客、中年層の個人客、県外客がメインとなっている施設が多い。団体客、外国人客、修学旅行生、市内小中学生をターゲットしている施設は比較的少なく、半数にとどまっている。実際の参加者についてもターゲットと似たような傾向にあるが、特徴として、若年層の個人客、中年層の個人客、県外客が多く参加しており、団体客、外国人客、修学旅行生、市内小中学生の参加は少ない傾向にある（図3）。ワークショップ実施の目的については、伝統工芸への理解醸成という目的が43件と最も多く、次いで販売促進、地域貢献が30件と多い。最も少ない目的は後継者育成で、伝統工芸への理解醸成の約4分の1となっている（図4）。

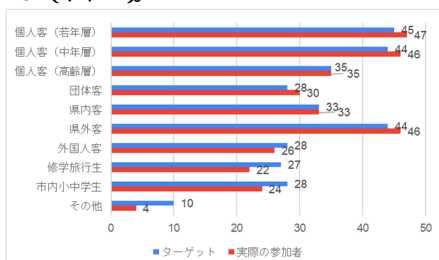


図3：ワークショップのターゲットと参加者

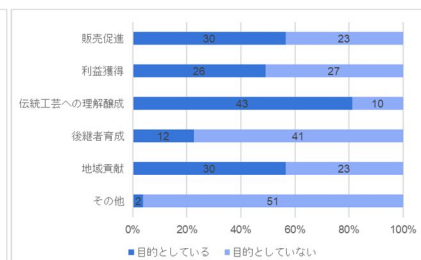


図4：ワークショップ開催の目的

実際にワークショップで伝達されている内容について尋ねた結果を図5に示す。「製造工程」が53件中44件と最も多い。次いで、「製造に必要な原材料」や「使用する道具」についての説明が26件と多くなっている。「製造に関する産業の現状」や「製造に必要な自然環境要因」の解説を行っている施設は約20%にとどまっている。伝統工芸を理解するのに必要だと思われる歴史的背景や現状、自然環境要因など細かい部分の説明まで行っている施設が少なく、実際に使用しているツールに関して、実物や完成品の展示をしている施設の割合が約半数を占め、マニュアルやシナリオ、説明や解説が掲載された配布物やパネル等の設置をしている施設の割合は10%前後となっていることがわかった（図6）。これらのことから、開催側はワークショップを実行することへの意識と、その中身に関する意識には差があると考えられる。

インストラクターを養成するための制度や研修については、88%の施設が未実施であり、伝統工芸の文化を伝える専門性の向上が課題となることがわかった。現状の施設の課題として、人員不足の課題が53件中13件、インバウンドや海外向けの対応策不足の課題も7件となっているため、人手の拡充も求められる。

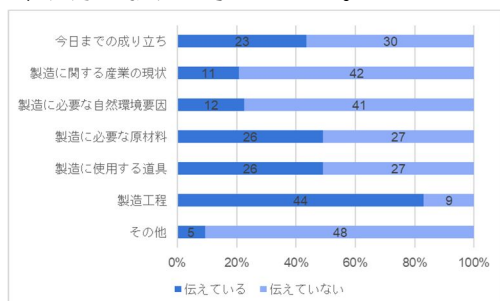


図5：ワークショップの伝達内容

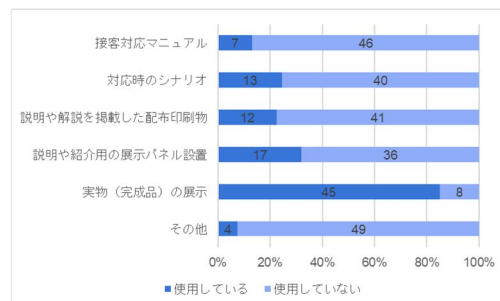


図6：ワークショップに使用されるツール

工芸ワークショップの参加とその効果について、全国の15歳～99歳の男女1002人を対象としたウェブアンケートにより把握した。回答者が実際に体験したワークショップの内容について、図7に示す。ワークショップに参加したことがない人が798人（約80%）と最も多い。参加したことがある人の中では、「ロクロ・電動ロクロ体験」が合わせて104件、「金箔貼り体験」が50件、絵付体験が39件、手びねり体験が36件の順に多かった。ワークショップの体験に至った経緯については、図8に示したように、「インターネットで知った」という人が76人（約40%）と最も多い。次いで、「ツアーのプログラムにあった」、「小中学校の授業の一環にあった」という経緯が多い。

工芸ワークショップ体験者204名を対象に、ワークショップを決定する際の決め手となる要素5つに対する重要度を調査した。「値段」、「内容」、「場所」の3つは、他の2つと比べて「とても重視する」、「重視する」と答えた人の割合が高く、80%を超えている。中でも、「内容」を重視する人の割合は約90%と最も多いことがわかった。一方で「開催頻度」が最も重視の傾向が少なく、「とても重視する」、「重視する」と答えた人の割合は約60%である。

ワークショップで実際に説明があった内容や使用したものについて尋ねた。「製造に必要な原材料の説明」が89件、「製造に使用する道具の説明」、「実物（完成品）の展示」がそれぞれ74件、73件だった。一方で、「今日までの成り立ちの説明」、「製造に必要な自然環境要因の説明」、



「製造に関する産業の現状の説明」の説明は少ない傾向にあり、前者2つが54件、後者1つが57件だった。

参加者から見た工芸ワークショップの内容については、「今日までの成り立ちの説明」、「製造に関する産業の現状の説明」、「製造に必要な自然環境要因の説明」は少ない傾向にある。説明や解説が掲載された配布物をもらったと回答した人の割合も非常に少なく、参加者の伝統工芸への理解に繋がっているとは言い切れないのが現状である(図9)。また、開催施設の約半数が製造に必要な原材料や道具についての説明をしていたことが明らかになっているが、実際に説明を受けたと回答した参加者の割合はそれよりも少ない。要因として、参加者が説明を受けたと認識していないことが考えられる。さらに、実物や完成品の展示をしていた施設がほとんどを占めたのに対し、参加者で説明を受けたと回答したのは約4割だったことが明らかになっていることから、開催側は伝統工芸や文化を知ってもらうことを目的として開催していることに対し、参加者の中には作ることが目的で文化を知ろうとせず、実物や完成品に目がいっていない可能性が考えられる。

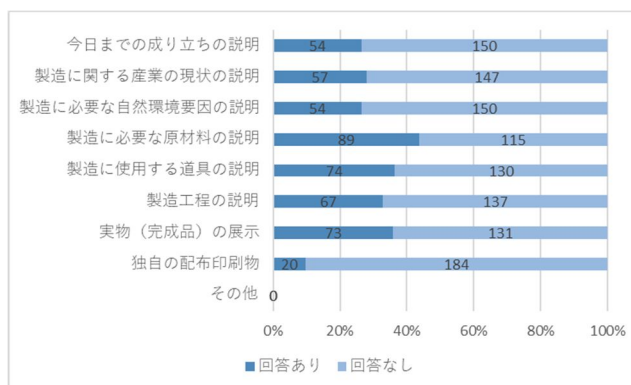


図9：ワークショップで受けた説明内容

### (3) 文化多様性と持続的な観光の評価と観光マネジメント方策の提案

北陸における工芸祭の取り組みのように、工芸における自然と環境の連関について理解を得るための観光サービスは工芸品や産地の構造によって形態は変わるものの、今日的な課題として取り組まれていることがわかった。

一方で、個々の施設において、伝統工芸の観光は従事者にとって人手や時間が十分でなく、観光に関する専門的な教育も十分でないことがわかった。ワークショップの開催目的として、「伝統工芸への理解醸成」と「地域貢献」が多かったが、伝統工芸を理解するのに必要だと思われる要素についての説明や配布資料の使用が少ない。特に、自然環境や産業の現状に関する説明は1割程度の施設でしかされてなかった。今後、ワークショップに参加することが学びに直結するような内容であるのかを検討する必要がある。

参加者がワークショップに参加する際の意思決定の要因としては、「興味惹かれる内容」が最も重視される傾向にあり、詳細として「文化に触れること」、「気軽に参加できること」、「オリジナリティ・実用性の面で自分が使えるものを作ること」が求められることがわかった。また、ワークショップの参加に前向きな人にとっては、これらに加えて、新しい経験に繋がったり趣味を広げたりするという目的があることも明らかになった。

開催側の意識と参加者のニーズを比較すると、「伝統工芸に触れ、理解する」という観点では需要と供給が一致している。しかし、両者にとってより満足度の高いワークショップにしていけるためにも、学びに直結するような内容を今後検討していくことは必要であると考えられる。特に、若者を対象としたプログラムを実施することで、両者の目的の達成に近づくと考えられる。実際に、伝統工芸への理解を深めるという目的で開催している施設は、修学旅行生、市内小中学生といった外部かつ若者へのアプローチが有効であると考えられている。

自然と文化の連関を観光者に伝える具体的な方法として、工芸品や産地の特徴に応じて、まちあるきやツアーガイドの実施が有効な産地、トークイベント、展示や映像作品が有効な産地の2つが存在することがわかった。このような取り組みは、従事者が個々に行うのは難しいが、産地内で連携した仕組みづくりを行い、個々の負担を軽減することで可能となる。実際に、他のワークショップの実態を知らないという施設が多く、連携の仕組みがないことが課題であること、産地内での観光サービスに関する情報の共有を図ることが求められている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Maruya Kota	4. 巻 2020
2. 論文標題 Nature-based cultural diversity and tourism management for traditional crafts	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Impact	6. 最初と最後の頁 79～81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21820/23987073.2020.8.79	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 丸谷耕太
2. 発表標題 地域を超え繋がる北陸のデザイン
3. 学会等名 2022銘傳観光国際研討會（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 丸谷耕太
2. 発表標題 北陸地域における地域資源としての工芸とその活用
3. 学会等名 イノベーションシンポジウム2023
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 丸谷耕太
2. 発表標題 歴史都市・金沢の文化観光とは
3. 学会等名 金沢・観光まちづくりフォーラム/歴史都市・金沢の文化観光とは
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 丸谷耕太
2. 発表標題 北陸工芸の祭典「GO FOR KOGEI」
3. 学会等名 JIDA Design × Talk / 地域を超え繋がる北陸のデザイン
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kota MARUYA
2. 発表標題 Design in Hokuriku that transcends regional boundaries
3. 学会等名 2022 MCU Tourism International Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 丸谷耕太, 石田和晋
2. 発表標題 事業者の意識と参加にみるオープンファクトリーの持続性
3. 学会等名 第34回日本観光研究学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丸谷耕太
2. 発表標題 金沢・能登のエコデモ活動のいま
3. 学会等名 九州産業大学景観研究センター「景観セミナー/レクチャーシリーズ2019」
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------